

うちの前の大通りを東に二十分ばかりゆくと、やはり同じように広い通りにぶつかる。そこを右に曲がって広い通りに入り、さらに六、七分も歩くと、郵便局や銀行、スーパーマーケット、ドラッグストア、洋品店など暮らしに必要な品々を商う店が並んだ一角に出る。

このあたりに買い物にゆくにあたって、私はいつも大通りの途中から横町に入り、住宅街を斜めに抜けてゆくことにしている。そのほうが四辺形の対角線を歩くことになり、いくらかでも近道になるような気がするからだ。もつとも、同じく近所に住む妹に言わせると、住宅街の道はかなり曲がりくねっているから、距離的には大差ないのではないか、ということだが。

住宅街は大通りと違って屋並みが低い。個人住宅はほとんど二階屋だし、二、三ある集合住宅も四階建てが限度である。そのせいか大通りのような圧迫感がなく、のんびりした気分になれるのが好ましい。

花木や草花が多いのも住宅街の魅力である。前庭に桜の大木のある家、垣根にジャスミンをからませた家、庭がなければ扉口の石段に草花の鉢を並べたり、隣家との隙間に蔓バラを咲かせているところもある。永年通っているうちにそれぞれの花の花期を覚え、買い物にゆくための近道としてだけでなく、花を見に歩きに行くこともある。

ところが近頃になって、あるちぢまりした集合住宅の一階から三階のベランダが隠れるまでに蔓を伸ばし、切れこみのある大きめの葉を青々と繁らせている植物があるのに気がついた。昨年もなくやら蔓草が伸びてはいたが、ベランダに干した洗濯物がよく見えていたから、これほどまでは繁っていなかったと思う。階下の住人が昨今はやりのゴーヤーでも植えたのだろう、ぐらいに思った記憶がある。

ともあれ何だろうとあって、近寄ってよく見ると、なんと十五、六センチほどの青い葡萄ぶどうの房がそこかしこに垂れ下がっているではないか。白い紙袋を掛けたものまである。葡萄の木本体はどこにあるのかと探してみると、建物の左端の地面から、直径三、四センチばかりの太さの灰色がかつた蔓状の幹が伸びていた。

この葡萄が実ったら、いったい誰のものになるのだろう。木の持ち主のものになるのはもちろんだが、葡萄のおかげでベランダに布団や洗濯物を干せなくなった二、三階の住人にも分け与えられるのだろうか。いまのところ葡萄の被害を蒙っていない四階の住人に対してはどうするのか。

この集合住宅の前を通るたびに、他人事ひとごとながらやきもにしている昨今である。